

〔補遺〕

副島辰巳の演説

一九四九（昭和二四）年、松本治一郎の追放解除を祝う会が、福岡市の東公園で行われた。

その演壇に副島辰巳を引き上げ、一席演説口調で反選挙の意義を、しゃべらせた。何しろこの会合は、解放部落の意気盛んなことを世間に訴える、いわば同和運動の一端であり、他所者をよせつけないのが当然であったが、黒旗を先頭に数人の荒くれ男が、しゃにむに演壇を占拠したため、彼等があっけにとられていた。

副島が何をしゃべったか、聴衆に聞こえる訳がない。ただ会場を黒旗によって沸かせたにすぎないが、その一瞬の出来事が我々に大いに役立ち、その後学生等の集まりもよくなった。

松本治一郎氏は、天皇も人間であると、天皇の前で愛用のステッキをつき、物議をかもしたが、後日代議士になった時、天皇より宮中でも使用できるステッキ（杖）を下附されたことのある人である。若い時からの同和運動（部落解放運動）の闘士であった。

伊串英治のこと

私の二番目の姉鈴子に聞いた話だが、戦時中、伊串は名古屋市内から疎開するために、大八車に母親を乗せて、神領（春日井市神領）の部落内を、どこか部屋を貸してくれる処はないかとたずね歩いていたそうだ。たまたま通りすがりにその姿を見た姉が、自分の家の納屋でよかったらいなさいと言って連れて帰り、納屋を改造して住まわせたそうである。伊串はその主婦が私の姉だということは知らなかったらしく、九州に来た時は何も言わなかった。

後日、名古屋の私の母の家で名古屋地協を持った時、小川正夫さんから伊串の疎開の話が出、それが姉の家であったことを知った。程なく、姉に会う機会があったのでたしかめてみたわけである。伊串も小川も今は世に亡い人だし、私としては直接関係もない事だが、伊串の人間としての一面を語る挿話だと思ふので書き留めておく。

小川正夫との出会い

私が小川さんを知ったのは、一九五一（昭和二六）年、私がガリ版で新聞を出しはじめた頃の事である。

私から原稿を書いてほしいと手紙を出したら、折返しその返事が来て、少し時間をくれたことであった。

それから十日程経って、原稿が届いた。

その事があってから間もなく、名古屋の生家へ立ち寄りかたがた、愛知県知多郡大野町にある小川さんの家を訪れた。

家は大野海水浴場に近く、二、三軒先には小川の河口があり、磯の香が漂ってくる。オゾンの流れるよき漁師町でもある。話によると、近頃では漁もだんだん少くなり、漁船は常滑の先の外海まで出掛けねば魚が獲れず、この町（大野町）は衰微の一途を辿っているとのことであった。

小川さんの家族は子沢山で、長女は嫁にやったが、まだ小さい子供が多く、奥さんは近くの幼稚園に勤めに出ていた。

私の訪問をお子さんが告げに行ったのか、すぐに奥さんが戻って来られ、お茶など用意して挨拶もそこそこに、また職場に行かれた。小川さんは私と話しながら、翻訳の仕事をつづけられた。見受けたところ、生活はあまり裕かではないように思われた。

私は小川さんが泊って行けと言うのを断わり、又の日を約し、二時間ほどいて帰った。

それ以来、私は名古屋へ出るたびに立ち寄ったものだ。最後に私が逢ったのは一九五七年の秋で、私の母が死んで後片付けをしていた頃、名古屋地協の集會を母の家で開いたが、伊串、すみぜんいち、小川潜（息子）達およそ十人ばかり集った。その時の話題は忘れたが、何でも私の出している新聞に協力すること、一人でも多く同志をふやそうということだったと思う。その晩、伊串ともう一人が私の所に泊り、夜、円導寺筋を三人で飲み歩いたりしたものだ。

忘れていたが、その後二、三回小川さんが私の家に来たことがある。それは、小川さんが娘の家を借りて塾を開いたので、何か英語の本を持ってないかという用件であった。私はさがしてみるからと、二、三日後を約束して別れた。私は母に頼んで隠していた本の中から、昔、丸善で買った英語の本三冊をさがし、渡したのだが、その時は一時間程話して帰って行った。それが、今となってはお別れであった。

手許にある第九回JAF全国大会の寄書きに、小川、山鹿、副島、久保さん達、亡くなった人達の思い出の筆の跡がある。

一九五七年、小川さんの年賀状のペン画に添えられていた挨拶状。

『北海道では百姓達は餓えている。ハンガリヤでは、折角芽が出た労働者評議会のイニシアチブは、ふみにじられてしまった。いやな鳥どものせいだ。今年は奴等が悲鳴を上げますように。元旦』

山鹿泰治・グラシア来たる

一九五七（昭和三二）年七月、山鹿さんがスペイン人グラシアを伴って副島宅へやって来た。電報で呼び寄せられた私は博多へ出た。副島夫妻と山鹿、グラシア、私の五人は大宰府の史蹟を巡った。夕刻近く炭坑を見たいと言う山鹿とグラシアを案内して私の家へ。私の田舎家でくつろいだ二人は、湯から上って浴衣がけで、夜おそくまでスペイン語、英語、エスペラントを混え、グラシアは辞書を引きながら、口角泡を飛ばした。

翌日、最も近い住友忠隈炭坑へ二人を連れて出掛けたが、労組の口利きも及ばず『外人に坑内は見せられない』と、会社側からことわられ、グラシアを失望させる結果になった。然し労組長と三十分余りの会話を気げんを直した。グラシアは私の家へ着くと、書画と床の掛け軸を指してせがむので、秘蔵の絹に書いた書と絵をプレゼントした。今でも彼が持っているかどうか解らないが、その後二、三年は、クリスマスにベネズエラやフランスからカード

を送ってきた。グラシアの文字は独特で読むのに苦労したものである。

私の家を出る時、山鹿さんが「折角九州に来たから、魔子に会いたい」というので住所を教えた。後日、私が魔子の病床を見舞った時、山鹿さんに会えてうれしかったと、彼女が喜んでくれた。

山鹿さんの死

一九七〇（昭和四五）年十二月六日朝、私の敬愛する先輩、山鹿泰治さんが亡くなられた。享年七十八歳であった。戦後京都に住まれる様になってからも、アナキスト連盟国際部を所持し『平民新聞』をエスペラント語に直して、各国のアナキストと交流し、諸外国の動きも我々に知らせて下さった。一九五一年、私がガリ版で『自由共産新聞』『平民新聞』を出した時には、激励文と共に毎回外国通信を送って下され協力を惜しまれなかった。

山鹿さんの父上は、号を拍年と呼び（本名・山鹿善兵衛）長崎でオランダ人に学び、活版印刷の技術を身につけ、一八七四（明治七）年京都で、日本最初の活字による印刷を始めた人である。その十二番目、七男に生れた泰治さんは、親の血を引いたというか、創意工夫に富み、器用で、活字やタイプライターを改造したり、古道具屋から安い電気器具を求め現代

調に直したりもした。物を大切に使える間は役立てるといふ考えのようであった。ハガキ一枚にも細い字で書けるだけ書いて通信された。また几帳面な方で、遺品を見ても、新聞の切抜きや記録なども年代別にきちんと整備され、特に生活記録は綿密な絵日記となって残された。

一九五四年秋、市川市中山町へ家を建てて京都から移られたが、その家の設計は山鹿さん自身がされたもので、小金井時代の長所を取入れ合理的に出来ている。限られた建築費であったろうから外観はともかく、如何にもアナキストのイメージにふさわしい家である。中山町へ移られてからの生活は楽ではなかったと思うが、公私の別には厳しく、連盟関係の収支も必ず総会で発表された。当時連盟国際部の費用は二千元であったから足りる筈もなく、封筒は古封筒の裏がえしか反古紙の手作りであったし、外国切手を売って費用の足しにされるなどの苦労もあった。何しろ僅かな金額だから総会でことさらに報告されることに、当時は戸惑いを感じる者もいたくらいだ。それも並々ならぬ意志力の人にして出来ることであったと今更感じ入るのである。

一九五七年七月、スペイン人グラシア氏を案内して九州へ来られた折、炭坑を見るためにわが家に一泊された。若い外人と同行してのことだから年令相応のつかれもありありと感じ

られたものだが、あの華奢な身体で翌年は印度旅行も実行された。自分が年をとってみると全く山鹿さんの実行力、活動力には、ほとほと感心させられる。

非暴力直接行動論、四次元の世界について、夜を徹して語り明かしたことなど、山鹿さんの思い出は尽きないが、常に中心になって我々の運動を推進した心棒が、遂に折れたという愛惜の情と虚脱感は何ともしがたい。

山鹿氏のアナキズム運動の功績については、もっと適切な方が詳細に綴ることを期待している。

四百メートルのシカチャン

たしか、一九四六（昭和二一）年の秋だったと思う。

麻生吉隈炭坑の運動会が、桂川小学校のグラウンドを借りて行われた時の事である。通称シカチャンの名で通っている、解放部落の中田鹿夫という青年が、四百メートル競走で一着になった。その時あがった歓声は、会場一ぱいに広がり、しばらくは拍手の波がやまなかった。

なぜ、そのような拍手が起きたかというところ、二百メートルぐらいまでは、先頭から五、六

番目にいたシカチャンが、そのあたりから次第に速力を増し、三百メートルではトップにおどり出た。それから、集団との間隔を次第に拡げ、ゴールに入った時は、三メートル以上も引きはなしていた。

わずかに百メートルの間に、これだけ離すことが出来るのはシカチャンにしてみれば、かなり自信があつてのことだろうが、見ているものにはわからないので、疾風のように駆け抜けていく脚の運びを、観客は、まばたき一つせずに見守っていたのだ。一番先頭に出た時に起きた歓声は、ゴールインまで止まなかった。

この中田鹿夫は、福岡県嘉穂郡碓井町の部落に生まれた好漢である。全部で三十戸程の部落であるが、△特殊部落△として世間からは対等の付き合いをもらえなかったので、この部落を訪れる人はまずなかったといつてよい。

★そこへ私が『平民新聞』を持って売りに行ったのだから一苦労であった。最初のうちは、スパイでもあるように警戒され、道行く人によびかけても、答はおろか、顔をそむけられたものである。新聞など見ようもしない。振り向きもしないと云った方が本当であろう。

それでもこりずに、私は毎日仕事が終わると、その部落へ出かけて行き、時には大声をはり上げて、『平民新聞』の記事を読んだり、時局を批判したり、人間の平等を説いたり、文字

通り懸命に努力した。

私が部落通いをはじめから、五日目のことである。集ってきた子供達に、炭坑で配給になった砂糖を少しずつなめさせた。これはてき面に効果を上げた。なにしろ当時砂糖は貴重品で、子供の舌にも、めったにのせられないものであった。その砂糖がもらえるとあつては大人どもも関心を示し出した。

その中に、私は鹿夫を求めたが、彼は仕事に出ていて、見つけることができなかった。しかし日ならずして、鹿夫と話し合うことができるようになった。

私の家の隣りに住んでいる人が部落出身であることを知り、その人に紹介をたのんだ。

最初、鹿ちゃんの家を訪ねた時、どこからか帰ったばかりの彼が、まだ門口に立っているところだった。私は『平民新聞』を一枚渡し「どうか読んで下さい」と言った。鹿ちゃんは私を知っていたらしく、ごくあっさりを受取ったが、「僕は学校へも行かなかつたし、難かしい事はわかりませんが、ゆっくり字引をひきながら、読ませてもらいます」と答えた。

家の中には、年老いたおばあさんが一人いて、鹿夫の顔を見るなり、「どこへ行ってきたか」と、どなった。

鹿夫の後について上にあがると、おばあさんが汚れた湯呑み茶わんにお茶をついで出した

ので、私は何気なくそのお茶をいただいた。

部落では、出されたお茶を飲むのが、親しい友情を示すことであると、後日鹿夫から聞いた。私の行為は、無意識であったが、誠に当を得ていたと言える。

それから、鹿ちゃんの案内で部落中を歩きまわり、平民新聞を売ることができた。中でも当時町長をしていた秋田氏が、部下を使って宣伝してくれたので、一そう新聞がさげけるようになり、とんとん拍子で、部落の人達とも仲よくなり、往き来もするようになった。私が吉隈の組合長、麻生連合の副会長にまで押し上げられることになったのは、この人達のおかげなのである。一九四七年、私が組合長になってからは一そう同和事業に力をそそぎ、部落の人達から何事によらず相談を受ける事になった。縁談も二三まとめたが、親子の争いや、就職の事など苦勞もさせられた。

もう一つ、部落の一角に住み付いた朝鮮人とも友達になり、言葉や文字の交換勉強と共に平和についても話し合った。これは私の生涯の願いであり生甲斐でもあった。そのため私は今日なお、いくつかの言葉を話すことができ、チョンゴシ、アボジでありたいと、常に願う毎日である。